

## 幕末期の「物産会」に見る物と人の交流

京都・大阪の「物産会」に出展された越中・立山での採集品から

吉野俊哉\*

### はじめに

江戸時代中期以降、本草学はその研究手法の変化や対象の広がりから、結果として博物学化したと見られる。それは為政者が各地で産物に関する情報を把握し殖産を図るためにも役立てられたが、一方で好学の大名から庶民にまで広く園芸が流行したり、珍しい岩石・化石等のコレクションブームが興ったりするといった趣味的な世界にも顕れた。そして金石、魚介、植物などを陳列し一般の観覧に供する「物産会」（この種の催しは「薬品会」、「本草会」とも称されたが、以下総称で用いる時は「物産会」という）が各地で開催され人気を博したこともその具体的な例として挙げられる。

これまで筆者は、立山をめぐる越中での近世本草学の受容を、採薬使の来訪、「富山藩薬品会」の開催を通して明らかにしたいと考え事例を整理してきたが、これらはいずれも他地域から越中に向かった人や物の流れからの視点であった。これに対して、最近筆者は、逆に越中から他地域へもたらされた産物や情報、それに伴う人の流れを明らかにすることで越中での近世本草学の受容がより具体的に見えてくるのではないかと考えるようになった。

例えば、その頃京都・大阪等で度々開かれた「物産会」での出品や出展者を記した目録には越中産、或いは立山産としたものが散見される。越中の産物が、当時そのような場所で出展公開されていたことはこれまであまり語られてこなかったことである。しかしこの点に着目すると、それらの品物の特徴や出展者からは次の二点が読み取れるのではないかと考える。一つは、京都・大阪などの文化的中心地にいた収集家、愛好家たちの間では、遠国越中・立山とは、近世後期の博物的な本草学の視点でどのような天産物、趣味的な目で見れば収集に値する品が採れる場所として知られていたのかという点である。これは同時に、彼らがどんな物に好奇心を持ち、興味の対象と意識していたのかということでもある。もう一つはそれらの品物が越中に産するという情報は、どんな形で中央に住む彼らに伝えられていたのかという点である。

---

\*富山県 [立山博物館]

そこで小論では、京都の山本讀書室（以下、讀書室という）で開かれていた物産会<sup>11</sup>の目録を中心に、越中と京都方面で開かれた「物産会」への出展品や出展者のつながりを取り上げたい。讀書室は京都の医学・本草塾だが、開設した山本封山<sup>21</sup>は越中高岡出身、またその孫山本溪山（以下山本溪愚<sup>31</sup>という）は青年時代に越中・立山を訪れ採薬を行うなど、特に越中との深い関係が考えられること。また長期間に亘り「物産会」の趣旨を異にせず、継続的に開催されていたこと。そして、現在その目録の多くが、まとまった形で閲覧可能<sup>41</sup>なことなどの理由があったからである。

そこで次章以下、「物産会」に出展された越中・立山での採集品の特徴やその出展者を挙げ、そこから読み取れる博物的な本草学を通した越中と京都・大坂との物と人のつながりを考える。更に中央との人のつながりを承けた、在地で博物的な本草学の受容について論じたい。

## 1 京都・大坂で開かれた「物産会」の特徴

生薬や珍しい動植物、金石などを陳列し一般に公開する「物産会」がいつ頃から始まったのか、博物学史上は断定されていない<sup>51</sup>。ただ、「本草会」、「薬品会」などと称していたことから、本草家が生薬の真偽や、善し悪しを討議するために始めた講読会や学習会が発展的に拡大したものが、源流の一つであったらうと思われる。後年江戸では著しく興行的、好笑的な会も開かれたが、ほとんどの「物産会」で出展品、出展者、産地などを記した目録を作成しているのは、これが単なる見世物から始まったものではないことの証左であろう。

その目録の存在から、早い時期の開催が確認できるものでは、江戸で平賀源内、田村藍水らが宝暦7年（1757）に開いたもの、また京都では豊田養慶が宝暦8年（1758）に開いたもの、大坂では戸田旭山が宝暦10年（1760）に開いたものなどがある。これらのことから凡そ宝暦年間がその最初期と考えられている。

その後三都では頻繁に開催され、後年地方へも広がった。また、会の規模も初期に出展数が数百点であったものが後には数千点、あるいは一万点を越えるものも見られた<sup>61</sup>ようである。このような規模の拡大は、当時の人々の持つ知的好奇心の欲求に拠ると見てよいであろう。

目録は会場で配布されたり、それをもとに出展品に就いての討議が行われたりしたと考えられる。現在多くが写本で残されているのは、目録それ自体が産物と産地に関する資料的な価値を持って利用されていたからではないかと考えられる。

三都の中でも、江戸と京都の「物産会」では、その意味付けにやや違いが見られるが、これは江戸と京都の本草学の伝統や学風の差によるものが大きいように思われる。学園として本草学を伝授して継承しようとする京都の学風に対して、江戸のそれは「物産会」を手段として華々しきや規模の拡大による、何でも有りの見世物を狙う気風を求めたと見られるからである。その違いを示す一例を「企画性」の有無と考える。京都では度々『本草綱目』や『詩経』、『金匱要略』等の本草書、古典に記載された草木に絞って展示品を募ったり、「詩歌に詠まれた草花」といった企画物産会も開かれていた。しかし江戸の本草家の間ではそのような形がほとんど見られないのは、江戸ではそのような比較的地味な形式があまり好まれなかったからかも知れない。それらは、京都の学者層の厚さ、教育的な面、加えて風流な遊び心があってこそ成立したものであろう。

京都では、家塾での講義を重視した長年の伝統によってすぐれた指導者を輩出し、各地から入門する多数の受講者を通して全国各地に広がる学統を形成した<sup>7)</sup>。それが「物産会」での出展品にも反映していたと思われる。

## 2 京都・大坂で開かれた「物産会」目録所載の越中・立山採集品

讀書室で開かれていた約60年に亘る「物産会」の内45回、他に「京都医学院」や大坂の「玄昌堂物産会」、「栗山氏物産会」等70種の目録を収録した『讀書室物産会目録四十六卷附録』<sup>8)</sup>を主に、明和3年(1766)京都で開かれた「東山也阿弥物産会」<sup>9)</sup>、「文久壬戌讀書室物産会」<sup>10)</sup>の目録を補完した72種から越中・立山で産出と記されるもの、及び推定されるものを抽出し、分類番号を付けてまとめたのが表1である。ここではまず全体を概括し、次項以下に主な出展品の特徴を詳述する。

表1を見ると、産地は単に「越中」とするものを除けば、砺波郡と射水郡(以下この2郡を越中西部という)のもの、立山山城とのものに大別でき、それ以外からのものは極めて少ないことに気が付く。また、「越中」の記載に誤記の可能性があるが、越中であっても、加賀との隣接地域では、産地が混同された表記や一部の地名に誤記の見られるものがある。在地の者が直接出展したものであれば間違える可能性はないだろうから、そのような情報は越中から直接伝わったものではなく、他地域の第三者の手を経て出展物を入力し、出展していたものと考えられる。

中には同じ品物が何回か繰り返し出展された場合も見られる。その場合、初回出展の結果評価をうけて二回目以降の出展を考える訳だから、出展回数多きには当時の愛好家たちの嗜好や価値観が現れていると考えられる。

## 2.1 立山での採集品

立山は、白山とともに小野職孝らによる本草修行が計画された<sup>11)</sup> ように、植生の豊かな点に着目された事実はある。しかしそれが立山に対する当時の共通する認識であったかどうかはわからない。立山の高山植物に興味を持った者は見られるが、具体的に薬草の宝庫とするような特別な認識はなかったようである。

越中を訪れた橋南溪は『東遊記』の中で、立山について「惣て立山は広大無量の山なれば、深谷峻嶺人跡の及ばざる所多くて、奇怪異品数多ありと也<sup>12)</sup>」と書いている例もあるが、当時は立山に限らず遠国各地に深山幽谷の秘境があっただろうし、同書には具体的に「奇怪異品」が詳述されている訳でもない。これを以って立山を奇品の産地として注目した記載と考えるのは難しい。

この時代までに作られた本草書の記載から見ると、立山は硫黄、黄耆などの産地として既に知られていた<sup>13)</sup> ことがわかる。しかし、今回挙げた「物産会」では、硫黄は出展されているだけで、他に生薬と呼べるものは贍養を数えるだけである。その他の品物を見る限りは、「物産会」がより博物的に、そして珍奇品を集めようとする方向へ進む時代の流れに符合したものである。「物産会」に出展品のうちで、立山で採集された物は植物と鉱物が中心であった。

当時の立山をとりまく時代の中で、紀行文や採薬記に書かれた文字情報、毎年の立山信仰の布教活動、また実際に立山へ登った参詣者からの伝聞などによって断片的に形成された潜在的な関心もあったと仮定すれば、全出展数と比べて多くはないが「立山」への関心の窺える品物もある。

そんな中で注目したいのは絶頂石、コガ子石などという、博物的な興味というよりも、むしろ個人的な登山記念だったと思われる品々が「物産会」の場で公開されていた事実である。これらはいずれも石そのものの名称ではなく、「コガ子石」は禪定道の途中にある黄金坂付近で、「絶頂石」はその添え書きから立山権現前（雄山山頂）で採集した石の意と解釈できる。幕末では、立山に登る人々の純粋な信仰の心に旅を楽しむ意識も加わるが、それが記念品を捨て持ち帰るような形で具体的に表れていたのはおもしろい。

また、京都の花屋解毒齋が立山の植物を出展している点も注目される。押し花だったのか、また採集した株を持ち帰り、京都付近で栽培し流通させた生花だったのか不明だが、既に高山植物の類が遠隔地で鑑賞されていたことは興味深い。当時は長崎を通して舶来した外来種の観賞植物も多く、それら含めた園芸ブームがあった。立山の植物への



関心もそのような時代背景で考えられるものであろう。

安政2年（1855）の讀書室物産会には立山採集の植物が大量に出展されている。これは山本溪愚が嘉永4年（1851）に立山で採集した際に持ち帰ったものと推定されるが、それ以前の文化13年（1816）、天保7年（1836）にも立山採集の植物が展示されていた。但し、入手経路の詳細は書かれていない。山本溪愚の立山採集は本草学と立山を結びつける重要な出来事だが、それ以前から既に讀書室の藏品には立山の産物があったのは、立山に関心が持たれていた証左であり、後年の溪愚による立山採集の動機にも影響したとも見られるだろう。山本溪愚が描いた『動植物写生図譜』中の「花卉三」<sup>149</sup>には「立山採集」と題した25点の写生画が残る。しかし、その中で物産会に出展しているのは「立山フグリ」、「三葉黄連」、「立山玫瑰」、「御前タチバナ」の4種のみである。また『入越日記』には、立山で得たとする草木など58種の名称が記載されている<sup>150</sup>が、その中で実際に出展されたものは「硫黄」のみで、記載された植物の出展はない。この、採集の成果に比べて物産会での出展数が少ない点は疑問である。

目録記載の名称が何に同定されるのか不明な品物もあるが、以下に目録記載の立山産品から特徴的なものを挙げ解説を加える。〔 〕は表1の分類番号。

#### 越州山姥ノタガネ 〔明3東-1〕

『雲根志<sup>160</sup> 後編卷之三』には、

山姥蟹 明和三年戊四月、京都東山産物会に山姥の蟹というものを出す。越中の産なりと。かたち蟹節のごとく、長さ六寸、後先尖りて中太し。色薄白く、少し節立つ筋あり。

という記述があるが、具体的に何に同定できるのか不詳である。

京都東山物産会の目録には出展者の記載はないが、『雲根志』の記述からは作者の木内石亭自身の出展だったとも解釈できる。

#### 山姥握飯 〔政11-1〕、山姥ノ握飯 〔天6-5〕

『雲根志三編卷之六』には、

越中立山はその奥深くして登山する人まれなり。近年地獄めぐりということをはじめて登山する人あり。地獄ダニというにいたりては種々の怪異なることあるよし。ある人ここに至りて大石のさげやぶれたるを見たり。その石の中にこの物あり。案内せし男に尋ぬるに、まれに川へ流れ出ることもあり。里俗山姥の握り飯という。

とある。記載内容から、玉滴石を指すものと考えられる。他の本草書にも立山産の玉滴石の類と思われる記述は見られ、当時から珍石として比較的知られていたことがわか

る。

上記二点にある「山姥～」の名称の由来は不詳だが、おそらくは能の「山姥」で越後と越中の国境境川付近で道に迷い、本物の山姥に出会うという設定からの地理的連想に関連するのではないと思われる。

#### 雷斧〔安3 讀-1〕

磨製石斧を指す。霹靂礮、キツネノマサカリなどの名称で各地の「物産会」に頻繁に出展された。当時は使用目的が不明の考古出土品を神代石と称していたが、収集家は各地で出土する様々な形の雷斧を分類しコレクションしていた。ここに挙げられた物の形は不明だが、全国各地から産出したものを多数一同に並べている中の一つである。そのような収集には、自ら各地へ採集に行く以外に各地の同好者とのネットワークが必要であり、この雷斧も、出展者と越中に住む同好者とのネットワークを通して収集されたと考えられる。

#### 三葉黄連〔安2 讀-1〕

山本溪愚筆『動植物写生図譜』「花卉三 立山採薬」に写生図がある。加賀、越中は黄連の産地として知られ、本草書の越中関係の記載ではよく紹介されており、写生絵図も多い。

#### 矮生玫瑰〔安2 讀-2〕、「立山小葉玫瑰花開者」〔文2 讀-1〕

山本溪愚筆『動植物写生図譜』「花卉三 立山採薬」に「立山玫瑰」の写生絵図がある。

#### 立山フグリ〔安2 讀-4〕

山本溪愚筆『動植物写生図譜』「花卉三 立山採薬」に「立山フグリ」の写生絵図がある。

#### 御前タチバナ〔天7 讀-2〕

山本溪愚筆『動植物写生図譜』「花卉三 立山採薬」には「御前タチバナ」の写生絵図があるが、山本溪愚の立山採薬以前の出展なので、讀書室がこれをどのような経緯で入手したのかは不詳である。

#### 石硫青〔政3 讀-2〕、立山産硫黄〔天3 a-1〕、石硫黄〔天6 讀-3〕

『雲根志前編卷之二』には、

石硫黄、諸国に産す。日本の産最も佳なり。予諸方より取り集めみるに、その色ことごとく違えり。攝州多田また平野、信濃国浅間また米子村、伊豆大嶋、相模国箱根、奥州会津、越中立山、越後明光山、加州白山、土佐国湯の山嶽、肥前嶋原、肥後阿蘇山、日向国霧嶋、伊予道後温泉等の産至品なり

(中略) 肥後国阿蘇山、信濃国浅間嶽、奥州南部地獄谷、越中立山の地獄、  
つねに火もえ上がる。

とある。

また、立山の地獄谷については、文政5年(1822)に立山を訪れた畔田翠山が『立山草木志』<sup>17)</sup>で次のように書き残した部分がある。

#### 硫黄

地獄谷ノ地ハ泥土皆硫黄也 透明ニシテ淡黄色 透明黄色ノ者アリ

奇効良方ニ舶上硫黄用透明不夾沙石者

又透明ニシテ微赤ヲ帯ル者アリ 本草ノ石硫赤ニシテウノメ也

又透明淡黄ニシテ青ヲ帯ル者アリ 本草ノ石硫青ノ上品ナル者也 焦熱地獄

ノ口穴徑リ尺余火焰発升ス 其口ノ辺燠タル粟ノ如キ硫黄高く積レリ

硫黄自体は、実用品だが、その質や色、形状にかなり細かな観察と分類を行い収集されていたことがわかる。

## 2.2 越中西部での採集品

城端付近の瑪瑙類や、笠石、木葉石などは出展頻度や出展者の階層の広さから見ても愛好家の間ではよく知られ、収集の対象にされていたと見られる。

結果として越中西部からの出展品が多いのは、新川郡や婦負郡(以下この2郡を越中東部という)などに比べて、対象となる品物の産出が絶対的に多いというよりも、京都に入った産地の情報量が多かったために相対的に出展数が多くなったのではないかと考える。その情報量の多さは、直接的には情報に介在する者の多さであり、間接的には文字に記された情報の多さによるものではないかと考える。

#### 硝石 [政3讀-6] [政10讀-2]、塩硝 [天6讀-10]

五箇山は良質の焰硝の産地として商品価値の高さから名前が広まっていた。黒色火薬の原料として重要な産物である。特に、幕末の度重なる外国船来航から海防の問題が浮かび上がってくると、爆薬の原料となる硝石に関する問い合わせが讀書室に殺到したという<sup>18)</sup>。度々出展されているのは、そのような時代背景が関係していたのかも知れない。

#### 瑪瑙 [天6讀-7]、瑪瑙髓 [政3讀-5] [政10讀-4] [天6讀-9]、金瑪瑙 [政3讀-7] [天6讀-9]、キンメノウ [政10讀-3]、青玉髓 [天9讀-3]

砺波地方の瑪瑙は、当初元禄の頃には火打石として生産され、のち珍石として鑑賞されたり、緒メ石などに使われたりして広まった。加賀藩の瑪瑙採掘に対する取締り政策は厳重で、盗掘や密売を禁じ<sup>19)</sup>ており、ここに挙げられた数種類の瑪瑙は、出展者が直

接採集したとは考えにくい。地元の収集家を通じて購入したか、譲り受けたものであろう。

『雲根志後編卷之一』には

馬腦または瑪瑙に作る。和産を最上とす。諸州より出でて品類多し。

(中略) 尾張国勝川にあり、また美濃国青墓山、信濃国荒倉山、陸奥国長者が宮、越中の川上城端、大井川にあり。

とある。

また、『越の下草』二には、

碼瑙山 吉江郷大西村山中にあり

大井川の水源なり、此川へ流れ出るを上品とす。然れども川上にては此川のみならず。山川とも所々にまゝ出るものあり、何れも大井川碼瑙といふ。水源の山折々試に掘せられけるに、よき碼瑙出る事稀なり。尤も禁令ありて、みだりに掘る事を許し給はず。近年石癖の人、自他の国々に多くて、価甚だ貴し。

薄赤又曇りて白きは、土碼瑙と唱へて下品なり。

白石英 赤石英 大小碼瑙 石釜 陽石 石礎 漣石 白赤土碼瑙

赤石大小 手まくら石 其他奇石品々あり。

とある。

城端、大井川付近で採れる碼瑙は、実用品としても用いられていた一方で、収集家の間でも珍重されていたことがわかる。

#### 木葉石 [天4讀-5]

木葉石は、湧出する炭酸泉が山中を流れる間に落ち葉に炭酸カルシウムを沈殿付着させてできた石灰華である。

『雲根志三編卷之三』には、

木葉石は産所品類ともに多し。加州麦水のいう、越中の国五ヶ山というは加州より流罪の者の行く所にて、常に通路は絶えたり。駕籠の渡りという難所を越えてこの地に至ることなり。ここの木葉石多し。もっとも上品なりと。また加州城端の真向うなる赤渋山<sup>20)</sup>にも木葉石あり。至品なり。

とある。

『越の下草』には、

村の東南の山より谷川出る。川の岸に春日大明神の小社あり。則此谷を赤そぶ谷と云。川も赤そぶ川<sup>21)</sup>と云。此社の辺へ落積草木の葉、おのづから凝り



かたまり、石に姿す。楓・柏の葉様々彫付たるか如く、切りても内に幾重も又葉の形あり。石色は黄赤にして、堅石なり。好事家此石をとりて、松竹或は奇花珍草を植て水盤に置奇愛翫とす。

とある。

カサイシ [天6讀-8] [天10讀-4]、海燕化石 [天7玄-1] [天8讀-2]

海燕はヒトデの一種タコノマクラを指す。ちょうど笠のような形である。この時代、貝化石も好んで収集されていたが、特に生薬として用いられたものではなく、土の中から貝やヒトデが出てくることにも興味をそそられたのであろう。

『越の下草』には図も付けた非常に詳細な記述がある。恐らく作者の宮村正運自身も収集家であったと推定される。

たさ二寸計笠の如し。田川村人家の後山崖にあり。何篇ともなく限なく積上げしもの、如く、穿ては五十枚も七十枚も一時に出つ。此中処々常の貝殻交りてあり。色は黄色にて潔白ならず。大和本草拾遺に、日本の中石見国と両国の上に産すといへり。しかれとも能浦にも間々あり。山中に会から又は貝の中に砂ありて蛤などの全体なるもの有。其論多しといへとも、石中又は山中に自然に産する理ありや。唯田川村に産する物は、一枚々一尺寸許間ありて積立てしもの、如し。取れば幾千万とも其数を知るへからず。奇といふべし。

とある。

海燕化石 [天7玄-1] [天8讀-2] を所蔵していた菴葭堂の貝コレクションと推定される資料が大阪市立自然史博物館に現存する。その中にはタコノマクラ科のヒトデが3点含まれており、内1点には「燕」と書かれている。しかし、産地についての記載はない。

牡蠣石 [天13玄-1]、越中高岡シ、ミ介 [天4讀-1]、石介 [天6讀-6]、石蚌 [天4讀-3]、石蛤 [天4讀-4]

これらは二枚貝類の化石を指す。「物産会」の目録で、貝化石を産地別に一覧にしたものをよく目にする。貝化石自体は各地で産するもので、これは特に越中産を注視しているものではないが、各地から産したものを多数収集<sup>239</sup>して、大きさ、色、形などで品位を決めて鑑賞する。このような収集の仕方は、各地の収集家同士でネットワークの広がることで価値が高まるものであろう。

瓢箪石 [安2讀-7]

「瓢箪石」の名称の初出は、文政5年（1822）の『射水郡産物稻名など相調理書上申帳』と考えられる。

一、瓢箪石 上ノ庄組深原村／同飯久保村

但、右村領内土堀等仕候節邂逅ニひやうたん形之石出申候<sup>24</sup>

しかし一方で、嘉永6年(1853)に富山城下で催された富山藩薬品会の目録では「越中氷見産團子石」の名称で記載されている。本草書には生姜状の鍾乳石や、球状流紋岩の流紋がつながっているのを瓢箪石と呼んでいる例はあるが、その時代に氷見飯久保産のこの石に対して瓢箪石の名称が広く知られていたかどうかはよくわからない。氷見飯久保の瓢箪石に関する記述は、同時代の本草書や目録には管見しない。

### 3 越中で採集された出展品に関する情報の伝播

本草書に記載されたり実際に品物が展示されたりするのは、当然それ以前にその情報を京都に伝える者がいたからだが、「物産会」の出展物から見る限りは越中西部や立山の物産に関する情報量は、越中のその他の地域に比べて多かったと考えられる。

具体的には、京都・大坂へ修学に行った越中の医者、特に讀書室へ入門した者たちや中央の本草家との師弟関係を持つ在地の収集家や文人たちなどの存在が、それに関わる者として挙げられるだろう。またその情報の元には、随筆などに現れた越中に関する博物的な記述があったと思われる。

情報の流れは物資や人の交流によって無数に存在するので直接出展物と対照させて特定することはできない。だが各地の珍品奇品への好事家や収集家の熱意や、俳諧などの文芸活動が全国的なネットワークを形成して活動の範囲を広げていた時代背景<sup>25)</sup>の中で考えると、情報に介在した者がいた地域的な密度や、地域的な関心の高さが出展物の産地の分布に反映していると思われる。

#### 3.1 出展者

出展者は、何らかの興味で出展物を開催時に所有していた者であり、彼らを介してある程度情報は廻れるが、そこに到るまでに何人の手を経ていたのか、中間にいた所有者を知ることにはできない。ただ、途中でどのような経緯があっても、その品の採集地越中と出展地京都をつなぐ線と、それを出展に値するとした認識が存在していたことは間違いない。

出展者の階層は医者を中心に僧侶、町人、農民であったが、不詳としたの中には武士らしき名前も見え、階層を越えた世界で関心と好奇心が持たれていたことがわかる。医者層が多いのは、日頃から本草の世界と身近にあって、このような方面への興味を持つ

機会が多かったからであろう。また僧侶が多いのは、讀書室を開設した山本封山が西本願寺の文如上人の侍読となって儒学を講じていたこと、待医が多く讀書室に入門していたこととの関連が考えられる。

出展者の中に越中出身は僅かに1名、能登・加賀の者と見られるのは2名、その他の多くは京都在住者で、越中との関連ある者のみが出展していた訳ではなく、収集家同士の交換や譲渡などの手段で広い範囲から入手した場合がほとんどである。

また、讀書室所蔵品の出展の多さが目立っている。讀書室自体の植物や鉱物、化石などのコレクションは膨大であり、越中関連の産物に限らず全体の中で出展数が多いのだが、特に立山関連の植物、鉱物がまとまっているのは、山本家の人々と越中との関係の深さに関係があろう。

併せて讀書室門人からの出展も多い。これには様々な理由があろうが、会の開催自体が修学の一環であったろうし、毎年開催する中で塾内で出展を促す雰囲気もまた高まっていたことが考えられる。

讀書室と関係の深い小野蘭山の門人からの出展もある。特に初期は蘭山門人の出展が主導的な役割を果たした<sup>26)</sup>。中でも越中・能登・加賀との情報の接点では能登の本草家村松標左衛門の存在が大きかったのではないかと考える。

この頃は、珍品を散発的に集めるだけではなく、各地から同種の化石や鉱物などを多数集め、その微妙な種の違いを愛でていた向きがある。そのため、広範囲から収集したいという欲求から各地との人的なネットワークが求められたと思われ、師弟関係や、寺院の組織関係はその際には利用し易い有効な手段であった。例えば、「豆斑石」（政9讀-2）を含む石をまとめて出展した田中寛輔、井出市二郎、小林畔二郎、安代啓輔らは讀書室門人だが、ともに本願寺との関係が深いことから、収集にはその勢力を背景として利用したとも考えられるとする指摘もある<sup>27)</sup>。

以下に、讀書室の関係者や越中・加賀・能登の関係者などから身元がわかる出展者について挙げる。

【讀書室の門人】（越中・加賀・能登の出身者を除く）

菱田主税は京都在住の鍼医。

岩永文植は医者。文政11年（1828）に入門。京都に生まれ、のち大坂道修町で医者を開業した。毎年大坂で玄昌堂物産会を主催し、大坂の本草界の中心となる。

三角律之助は医者。嘉永3年（1856）入門。典医三角家の支流三角有孝の子。

【讀書室】

讀書室が所蔵するコレクションからの出展で讀書室社中としたものは、外部の物産会

への出展に際して讀書室所蔵の品を指したものが、或いは門人たちの物を合わせたということか。山本永吉は山本封山の子で、讀書室物産会の初代会主山本亡羊のこと。

#### 【寺院関係】

興正寺御殿御蔵品は、興正寺の上層部に収集を趣味とする者がおり、寺の収蔵品となっていた物から出展したのであろう。讀書室と興正寺との関係は深かったようで、山本溪愚は興正寺から依頼されて杉戸、戸袋に飛燕の図、蘭の図を描いている。

覚王院も寺院関係と思われるが讀書室との関係は未詳。

#### 【町人】

兼葭堂（木村巽齋）は津島恒之進に本草を学び、49歳で小野蘭山に入門。大坂の町人学者、好事家としてよく知られる。但し、兼葭堂自身は享和2年（1802）に没しているので、一連の物産会出展は遺族か門人など関係者による出展と考えられる。兼葭堂の没後、その養子坪井屋吉右衛門と奉行所との間で遺品の蔵書と蔵品の処置についての交渉があり、幕府が求めたものは上納手続きをとって江戸へ運ばれた。その中には多数の書籍に混じって「物産」としたものが121品見られる<sup>28)</sup>。一連の「物産会」での展示品はそれを除いたものであろう。

花戸解毒齋は京都市中の花屋。幼年時に小野蘭山に従って採薬を行った。山本榕室の日乗には讀書室と書信のやりとりや訪問、草木の購入の記録<sup>29)</sup>があり、讀書室物産会への出展回数も多い。

江州山田 石亭蔵品は木内石亭が文化5年（1808）に没しているのもので、その旧蔵品から門人が出展したものと考えられる。

#### 【越中・加賀の関係者】

長崎愿禎（越中）高岡の蘭方医長崎浩齋のこと。文化14年（1817）大槻玄沢に入門。天保5年（1834）小元瑞に入門。神農講の再興に力を入れた。その博物的な興味については後述する。

岡嶋玄俊（加賀） 医者。讀書室門人。天保3年（1832）入門。氷見の町医西井良朔の子で、のち加賀藩医岡嶋顯亭の養子となる。

奥道逸（加賀）加賀藩の医者。小野蘭山の門人で、寛政9年（1797）9月10日には蘭山らと白川山から比叡山で採薬を行った。

奥常陸大掾（加賀） 医者。奥道逸の子、奥道貞。

村松標左衛門（能登）能登羽咋郡の豪農。寛政の頃、小野蘭山に入門。後に帰郷し加賀藩産物方に仕えた。「蘭山先生村松標左衛門氏に与ふる書牘十三通の写し」<sup>30)</sup>には、能登に住む村松とその師蘭山とのやり取りがわかる13通の書簡が掲載されているが、そ



こには子弟関係を通した地方と中央の情報と物産の交流の一端を表れている。

其六

(前略) 海兔等の儀御承知被下忝候。此度銀二十・大チクサ二品・御恵被下忝候。ヲヒキ貝も留置申候忝候。外に能州方言巻冊被遣忝候。此度大箱之中、薬品・介類・艸木・押葉等被遣一覽之上加朱申候。薬品之内宜候品は加朱申候間、左様に御心得可被也候。(後略)

其十

(前略) 且又富木浦小介式箱御恵被下忝謹取入候。(中略) 又ミナシ介之義致承知候、乍併此節は尋常の品類も皆々余慶無之候故、進呈申難候(後略)

在地で採集した金石、貝などを中央の師に送り、朱書きをして返送すること。また標本のやり取りも行われていたことがわかる。恐らく中央の師と在地の弟子の関係とはこのような形が基本だったのではないだろうか。中でも其六文中に「能州方言巻冊」とあるのは、のちに『本草綱目啓蒙』に載せられた膨大な方言資料の収集過程を窺わせる内容である。

## 3.2 越中西部で産する物に関する情報

### 3.2.1 越中西部に住む医者たちの博物的な本草学への関心

「物産会」と越中を結ぶ中で、もう一つの重要な点は、高岡に住む医者たちが越中での博物的な本草学の展開にも大きな関与をしていたことである。越中東部、富山城下の医者たちに比べて、彼らの多くが京都・大坂の医学塾への修学に行っていた<sup>31)</sup> ことにより京都方面の物産会に関する情報が入りやすく、同時に越中西部の情報を京都へ仲介できる立場にあったと考えられる。そして彼らの中には、讀書室へ入門し、その際に物産会を身近に見て関心を持ち、塾で医学や本草学を学ぶ一方で博物的な本草学にも目を向ける者がいたことがわかる。特にまた、彼らの多くが京都・大坂の医学塾へ入門し、そこで形成された師弟関係のネットワークを通した情報の流れには無視できない部分がある。

彼らを通して京都に伝えられた越中の博物学情報は、「物産会」での個々の出展物から具体的に見えてはこない。しかし彼らを通して越中にもたらされた「物産会」の概念は、一般に広く公開するものでなかったとはいえ「神農講」の中で物産展示を行っていた事実に表れている。

### 高岡の医者たちの神農講

「神農講」は高岡の医者たちの学習会であり、また詩文を楽しむ親睦の会でもあった。

その始まりは正徳年間とも言われるが、その後中断と再興を繰り返し、文久の頃には完全に途絶えた<sup>32)</sup>。天保11年(1840)の冬に津島北溪、長崎浩齋らが中心になって中断していた講を再興した後、天保から弘化にかけての「神農講」の記録『方意便蒙』<sup>33)</sup>には、「産物展示」と称する催しが数回持たれ、少数ではあるが博物的な品物が供覧されたことが記されている。これは、本草の学習会から陳列品を公開する「物産会」へ発展していったのと同じ過程を踏んでいるように見えるが、結局、博物的な内容はあまり受け入れられなかったようで大きな発展を見せていない。

『方意便蒙』には、再興を成して講にかける思いを記した長崎浩齋と津島玄碩の識語が載せられている。浩齋の識語には、

(前略) 肝嬰の医話を捌き、只花鳥風座の雑談のみに遍し成れるを津島東亭いたく嘆き、せめて産物一品づつ携出、席上にて質問せば、見聞広むる乃益あらむ。都会にても物産会とて折々ある事なればと云う。皆これに従ひ持出たりしが、次第に数へり此頃大きに衰えたり。(後略) [下線は筆者]

とあり、また玄碩の識語には

(前略) 名産物一二品ヲ携出テ衆覧セシメバ葉状・効能・真贋等ニ精シク達シ、其ノ益多カラント計リシニ、五七会ニシテ段々衰へ、遂ニハ持ち出ル人稀ナリ。ココニ於イテ長崎浩齋憤ヲ発シ、諸賢ニ医事ヲ勸貢スルノ一篇書アリ。(後略)

とある。

浩齋は讀書室物産会にも出展しており、高岡と京都の本草学をつなぐ立場にあったと見られるが、識語からは、都で開かれた物産会を強く意識したことがわかる。彼は博物的な本草学に興味を持ち、自らも多くのコレクションを所蔵していた。

それを示す例として、加賀藩の儒者金子盤蝸が立山禪定登山の際に記した紀行文『立山遊記』には、高岡で長崎浩齋を訪ねた記述があり、浩齋の博物趣味の一端や、それに同調する神農講会員の医者名前が挙げられている。

長崎浩齋ヲ訪フ也。話して時を移す。昼飯。午後諸子集まり会す。金子恕謙、津島、上子<sup>34)</sup>、半村、元臺等来ル。(中略) また石環刀ト云う物ヲ持参す。此れ八十年前二上山ノ頂ヨリ掘出すト云う。石質鼠色ナリ。甚だ奇品ナリ<sup>35)</sup>。

浩齋琉球産ノ文具類ヲ蔵ス。其の形甚だ奇ナル物有り。又古銭ヲ多ク蔵ス。

内ニ奇品モ在リ。又石牙ヲ蔵ス。(中略) 其の他物産種々有り。

神農講を通した越中西部の医者たちの博物的な本草学への関心は、越中での学芸活動

の展開を語る上で興味深い。

### 神農講での物産展示

神農講の席で展示されていた品物は、記録されている4回でわずか10点ほどだが、一つ一つの品物を見てゆくと、薬草鑑定に終始せず博物的な展示だったことがわかる。

以下『方意便蒙』にある記載を挙げる。

(1)この回には、行われた日付の記載がないが、弘化2年2月14日の会の次で和田彦齡「子痢の鍼及び内服薬治療のこと」の検討会記録に(附)として4品が挙げられている。

(附)

- |     |  |                     |
|-----|--|---------------------|
| ・海牛 | ス、メウヲ <sup>36)</sup>   | 上原迂齋 <sup>37)</sup> |
| ・海馬 | タツノヲロシゴ <sup>(マツ)</sup>  | 津島玄碩                |
| ・芹  | 蛮産   | 服部修徳 <sup>38)</sup> |
| ・桜木 | アセボ 又馬酔木ト云フ。牛馬此ノ葉ヲ食ヘバ酔フ、故ニ名付ク。菜ノ葉ニ黒キ虫ノタチタル此ノ葉ノ煎汁ヲ灌ゲハ死スト云フ。微毒アリ | 彦齡 <sup>39)</sup>   |

(2)産物展示／三月十七日(弘化2年-筆者)

- |  |                 |                     |
|--|-----------------|---------------------|
| ・焼米石   | 於嵐山嶺頂、高西又六城跡所拾。 |                     |
| ・弘化二年乙巳正月十九日、於紫宸殿前拾一樹実。其状似胡頹子 <sup>41)</sup> 不同者 |                 | 高峰元臺 <sup>42)</sup> |
| ・蘿蔔殼 <sup>43)</sup>                              |                 | 長崎愿禎                |

(3)この回には日付はないが、弘化2年4月26日の会の次に松田三知の「てんかん症例」検討会の記録に(附)として4品が挙げられている。

- |                     |                                 |                     |
|---------------------|---------------------------------|---------------------|
| ・当字栲 <sup>44)</sup> |                                 | 長崎愿禎                |
| ・棟                  | 和名アフチ俗名センダント云フ 去年富山ニ生ヘ候ハ此ノ木ナルヘシ | 国分三衞                |
| ・我カラ <sup>45)</sup> |                                 | 松田三知 <sup>46)</sup> |
| ・大実五葉ノ実生            |                                 |                     |

(4)(附)産物展示 乙巳九月十一日の「脳漏鼻淵の治療のこと」の会に2品が挙げら

れている。

- ・フラーツバトス<sup>47)</sup> 彦逸<sup>48)</sup>
- ・蟹蛭<sup>49)</sup> 山本道斎<sup>50)</sup> 有無陽公于伝 愿禎

「海馬」、「馬酔木」などは生薬となったが「焼米石」、「我カラ」、「五葉松」（おそらく盆栽か）、フラーツバトスなどは博物的な展示である。講の中にはこのような品を愛でたり、討議したりする雰囲気があったことは重要である。これによって、規模や格式に違いがあっても、京都の「物産会」と越中高岡の神農講とは人的なつながりを持っていたと言える。

### 3.2.2 在郷の文人の介在

越中西部の物産情報と京都の仲介には、高岡、城端などに住む博物愛好者や、文人も役割を果たしていたと考えられる。

当時北陸の一大文化都市であった金沢の文人と中央とのつながりは数多く見られるが、上洛の折や書簡の往来を通して様々な在地の情報が京都へ伝えられていた。井波や城端、福光など町人の文芸活動が盛んだった越中西部も金沢の文化圏内であったと見ると、金沢の文人との交流の中で高岡や砺波の文人たちが見聞きした情報もまた彼らを介して京都へ伝えられたと考えられる。また、本草学や俳句を嗜んで教養とした医者、僧侶なども京都などとネットワークを持ち、越中に関する博物情報を中央に住む同好の士や師へ伝えたと推定される。博物愛好家の収集欲とネットワークの広がりには比例していたのではないだろうか。本草書に現れた越中の博物情報には、地元の伝承や、在地の者でなければわからないような内容がある。それらが越中を訪れたことのない中央の人物の著した本に見られるのは、各地とのネットワークによる情報の入手なしには考えられないことである。

ところで、俳句や和歌などの文芸活動と博物的な本草の世界は、一見異質なようにも見えるが、江戸時代の学芸活動の中で見れば、共に、人を取り巻く自然へ目を向け観察する姿勢に共通するものがあり、両方を教養とする者も少なくない。例えば、文芸に現れた花鳥風月に代表される自然に対する鋭い観察と、それに関する博物誌は創作の基本教養と考えることができる。この点は中国の本草学も同様で、古典文学に記された植物を研究するための教養とされた。

師弟関係をもとにした交流の例は、前章で述べた村松標左衛門と蘭山の場合と同様なのだが、ここでは、趣味の世界でつながった堀麦水と木内石亭の例と、間接的に関係が推定される『越の下草』の作者宮永正運の例を挙げる。



## 木内石亭と堀麦水

木内石亭の著で全国各地の石類を紹介する『雲根志』に記された越中に関する記述は全編で15箇所見られるが、その多くは金沢の俳人堀麦水<sup>31)</sup>が石亭に伝えた内容である。石亭と堀麦水は弄石の趣味を通してつながりを持ち、書簡だけではなく直接麦水が石亭を訪ねるなど<sup>32)</sup>交流があった。越中産の珍石類に関する情報の中には、麦水を通じて石亭へもたらされ、さらに『雲根志』の刊行によって広く知られるようになっていったものがあると考えられる。例えば五箇山、砺波や立山に関する記述が好事家の収集欲を刺激したことは想像に難くない。

具体的な記述は次の点である。麦水の手を經ての記載ということで細部にやや不明瞭な点も見られる。(表1の「物産会」出展物を除く)

### 天柱石<sup>33)</sup>

越中国駕籠の渡りを越えて五架山<sup>34)</sup>という所あり。もつとも難所にして常に往來する所にあらず。加州より流罪の者を送りたまう所なりと。ここに天柱石という大石あり。加州金沢堀麦水の物語なり (三編卷之六)

### 材木化石

加州麦水のいう、越中立山へ芦倉<sup>35)</sup>よりのほる麓、最初の坂口土中残らず数千の材木にしてことごとく石と化せりと。(三編卷之三)

これは溶岩が材木状に固まったもので、材木石と呼ばれるもの。木材の化石(珪化木)ではない。立山禅定道には材木石が散在する材木坂がある。

### 万物化石

また加州金沢麦水のいう、越中城端の真向いなる赤洪山という所に万物石に化する地ありと。(三編卷之三)

万物化石というと、すべてが石になってしまう超自然的な連想をしてしまうが、これは石灰分を多く含む水が、中に入った物に付着して石になることで、木葉石の生成と同じことを述べている内容である。

## 『越の下草』の作者宮永正運

『越の下草』に書かれている内容に砺波地方の博物的な内容が極めて多く、部分的には大変詳細なものがある。

『越の下草』は天明6年(1786)に完成、のち何回か加筆された随筆集である。作者の宮永正運は享保17年(1732)越中国砺波郡下川崎村に生まれる。後年砺波・射水両群の盜聞横目役、山廻り役を命じられ、越中三郡の産物裁許役も兼ね、加賀藩から朝鮮人参の栽培を命じられたり、甘草、黄連などの栽培普及に当たった<sup>54)</sup>。また、教養ある文人

でもあり、和歌を婦負郡宮尾村の内山逸峯に学び、漢詩を富山の佐伯良平に、連歌を木村平兵衛、俳諧を伊勢の幾曉庵雲蝶に学んだという。更に本草学は城端にいた直海元周<sup>56)</sup>に、茶道は金沢の藤沢宗貞、禪は福野恩光寺の瑞巖和尚に学んでいる<sup>56)</sup>。

この中では、城端に生まれ京都で活躍し、初期の「物産会」に深い関係を持つ津島如蘭、戸田旭山らと親交が深かった直海元周との師弟関係が注目される。元周の交流を通じた、正運と京都本草界と接触があった可能性が想像できる。

同書には本草の視点から見ても興味深い記述が多いが、特に田川村の笠石には図まで付して、他に見られない詳細な説明を載せている。地元であっても、相当にこの方面に興味を持っていた者でなければ、このように詳細な記述は不可能であっただろう。瑪瑙山や、笠石、木葉石など博物的本草学の視点でも興味深い記述がまとまっているのは他には見られない。その意味でも本書の内容が何らかの形で中央に伝わった越中西部の博物情報の情報源となった可能性が考えられる。

越中の情報が金沢の文人たちを通して中央に伝えられるという形は、文化的な影響を富山城下より色濃く受けた加賀藩領越中西部に現れていたと考えられる。そして博物的な本草学について言えば、その担い手の違いは越中東部での展開の違いに表れている。越中西部ではその主体が町人、特に町医者だったことで、比較的に関係が広がりやすかったと考えられる。それに対して越中東部ではそのような具体的な事例は見られず、富山城下での本草学と言えば、前田利保が本草に興味を持つ藩士たちと趣味的な本草サロンを形成する形で展開したことがクローズアップされる。主唱者が高い所において対象が家臣たちであったことで、情報の広がりはずと制限され、その活動が町人は言うに及ばず、藩士に広がって受け入れられたとは思われない。利保の亡き後はそれが継承されることなく消滅してしまったことからそれはわかる。その理由は様々あるだろうが、一つには富山藩の売薬産業との関係が大きいと思われる。本草学と生薬、売薬は近い関係にあり、売薬業の隆盛は本草学への興味を持つ者の広がりを生むのではないかと考えられるが、実際は売薬と結びつく生薬学としての本草学と、博物的なその広がりとは連動しないものであった。このことにより、却って博物的な本草学とは富山城下では根付かないものであったように思われる。

## おわりに

京都と越中との産物や情報に関する事例では、特に当時加賀藩領の越中高岡に住む医者たちを通じた京都の本草学とのつながり、博物的な本草学への関心の高さは興味深い

ものである。

讀書室物産会を中心に、京都・大坂で開かれた「物産会」で立山や越中西部の採集品が多く見られるのは、その情報を伝える多数のネットワークが存在したからである。その担い手となったのが越中西部に住む医者や文人、特に師弟関係や同好の関係を持つ者たちであった。師弟関係は普通、入門によって結ばれる。京都で開かれた「物産会」に見る越中西部とのつながりの深さの一因は、京都での修学者の割合が、越中東部・富山城下の医者に比べて圧倒的に越中西部の医者に多かったことと考えられる。しかも彼らの中に高岡の有力な医者たちがいたことの意味が大きく、彼らを中心とした「神農講」を通して越中西部での博物的な本草の展開へつながっていったと見られる。

これまで越中での博物的な本草学に関しては、その中心だった前田利保が緒鞭会の活動を通して江戸の本草学の延長上にあったため、その方面からの研究がなされてきた。しかし小論で取り上げた京都とのつながりは、利保に関連するものとは別の展開として調査をすすめる必要がある。

また、金沢の俳人堀麦水と石亭との趣味を通じた関係、村松標左衛門と小野蘭山との子弟関係に見られるように、文人同士の情報交換の中からも伝えられたものも見られた。

「立山」については、本草家の採集上の関心がモチーフとなろうが、これは薬草というよりも、珍しい草木探求への欲求が背景に考えられる。それには当時の園芸のブームによる、外国産の園芸種も含めた珍しい植物への需要があったことも関係していると思われる。また立山での採集品からは、遊山の要素が加わった幕末の立山を取り巻く時代背景も垣間見られる。立山禪定登山との関連も、人と情報のつながりの上では無視できないと思われるが、詳細は今後の研究を俟ちたい。

大聖寺藩旧蔵の漢籍調査の過程で、大聖寺藩での学芸活動の担い手が医者層であったという指摘<sup>57)</sup>があるが、地方都市での文化的活動の担い手であった知識層が富裕な町人や医者、僧侶らであったことを考えると、俳諧や中国の古典、儒学と本草学を教養に持つ医者層が学芸面からその地域の文化活動を支えていたことは十分に考えられるし、それは金沢や富山でも同様であろう。近世後期の博物学化した本草学の守備範囲を、方言、民俗をも含んだ、広く教養の総体と考えると、これは近世後期の地方での学芸活動の担い手とその展開を研究する上でも重要な切り口と言えるだろう。

小論では京都・大坂の「物産会」での出品品を通して越中とのつながりを考えたが、もう一つの中心であった江戸での「物産会」に越中の産品が出品されていた可能性がある。但し『物類品騰』には越中産品の記載はないので、「物産会」の初期である宝暦頃には深いつながりが見られなかったようである。しかし、少数ではあるが越中から江戸

へ修学に出かけた医者たちもいたので、それ以降に幕末にかけて開催された躰寿館薬品会等の出展品が明らかになれば、江戸との情報の流れについても論ずることができるであろう。

その意味で小論はまだ部分的なものではないが、更に他の「物産会」目録からの事例をもとにした情報ネットワークに関してご教示を賜れば幸いである。

## 註

- 1) 遠藤正治「読書室物産会について」(『実学史研究Ⅱ』思文閣 昭和60) 参照。

読書室の「物産会」では代々の当主が会主となり、初期に自宅外の場所を会場に開いたものを含めると、文化5年(1808)から慶応3年(1867)の間に50回開かれた。

- 2) 寛保2年(1742)～文化10年(1813)。越中高岡日下小兵衛の二男。京都で修学中に山本家の養子となる。読書室は天明6年(1786)に封山が開設した。

- 3) 文政10年(1827)～明治36年(1903)。名は章夫。はじめ溪山、のち溪愚と号する。

嘉永4年(1851)、25歳の時越中を訪れ、立山へ登り採薬を行った。その時の記録『入越日記』の自筆稿本が現存する。現在、正橋剛二氏がその翻刻と注釈を進めている。

- 4) 読書室物産会のうち45回分と、同時代に京都で開かれたその他のもの7回分、大坂で開かれたもの16回、伊勢2回、長崎1回分の目録の写本を合本した冊子が西尾市立図書館岩瀬文庫に所蔵されている。

『読書室物産会目録(内四冊岩永氏物産会及大坂京都諸家物産会)』12冊 写本  
請求記号 [三〇一函一二号]

また武田科学振興財団杏雨書屋には、同書の写本が所蔵されている。

『読書室物産会目録四十六卷附録』二十五卷 写本15冊 請求記号 [杏5944]

他には、名古屋市東山植物園には伊藤圭介の写本による『読書室物産会目録』17冊が所蔵されている。『伊藤圭介記念室蔵書・藏品目録』(名古屋市東山植物園編)による。[ ]は請求番号。

『読書室物産会目録』第四回(文化8)[5-1]、第七回(文化13)[5-2]

第十二回(文政9)[5-3]、第二十回(天保4)[5-4]、第二十一回(天保5)[5-5]、第二十九回(天保13)[5-6]、第三十回(天保14)[5-7]、第三十三回(弘化3)[5-8]、第三十七回(嘉永3)[5-9]、第三十八回(嘉永4)[5-10]、第三十九回(嘉永5)[5-11]、第四十一回(嘉永7)[5-12]、第四



- 十二回（安政2）[5-13]、第四十三回（安政3）[5-14]、第四十四回（安政4）[5-15]、第四十七回（文久2）[5-16]、第四十八回（文久3）[5-17]
- 5) 『蒹葭堂雜録』にある「津島氏モ毎年浪華ニ下リ、本草ノ会アリ」を根拠に『年表日本博物学史』には宝暦元年の項に、津島恒之進が「物産会」を行ったとする記述が見られるが、「本草ノ会」が本草書の会読会だったのか、展示を供覧したものか不詳として、これを「物産会」の始まりとする見方には疑問も持たれている。
- 6) 『年表日本博物学史』によれば、天保3年（1832）に福井春水が江戸で開いた薬品会を、『江戸繁盛記第二編』からの引用として「其他ノ品物一時雲集ス。其数凡ソ七千余种」としている。また、『尾張名所図会』前編卷之二には「尾張藩医学館薬品会」の図に添えて「山海の禽獸虫魚 鱗介草木、玉石銅鉄等のあらゆる奇品をはじめとして竺支西洋東夷の産物までを一万余种集め広く諸人にも見る可きをゆるし」とある。
- 7) 上野益三『博物学者列伝』（八坂書房 1991）42～43頁参照。
- 8) 註4 参照
- 9) 木村陽二郎編『白井光太郎著作集第I巻』（科学書院 昭和60）338頁～344頁に翻刻された資料による。
- 10) 『文久二年壬戌五月九日十日平安読書室物産会品目』（東京国立博物館蔵）請求記号 [和563] による。
- 11) 文化5年（1808）に本草修行のために4月22日に江戸を出発して美濃、京、大坂を巡って白山、立山で採薬を行い、閏6月15日に江戸へ帰った。いわゆる百日採薬と呼ばれたものである。
- 12) 『東遊記補遺』東洋文庫『東西遊記1』（宗政五十緒校註 平凡社 1974）による。
- 13) 『重訂本草綱目啓蒙』には、卷之七 石之五 鹵石類で「石硫黄 タカノメノユウウ」の産地群の中に越中ノ立山を、卷之八草之一山草類で「黄耆」の産地の中に越州立山を挙げている。『和漢三才図会』には卷六十八で越中土産の中に「塩硝」「黄連」「鉛」亀谷などを挙げている。
- 14) 絵図順に「未詳」、「紺レン」、「岩キンバイ」、「三葉黄連」、「岩ギキヤウ一名白山ギキョウ」、「チングルマー一名チゴノマイ」、「ツガマツ」、「黄花ツガマツ」、「立山玫瑰」、「未詳」、「金梅サウ」、「御前タチバナ」、「ウサギ菊」、「カモメラン」、「ヤナギサウ」、「銀梅サウ」、「ハクサンイチゲ」、「キクブキ」、「五葉イチゴ」、「紅葉カラマツ」、「立山フグリ」、「未詳」、「マメナー一名岩イテウ」、「未詳」、「ランノレー一名大バ子バリ」の25種である。
- 15) 正橋剛二『近世後期における本草学史上の立山について』（富山県立山博物館調

査研究報告書〕1999) 50～51、69頁参照。

- 16) 今井功注解『雲根志』(築地書館 1969) 参照。以下『雲根志』からの引用は同書の翻刻による。
- 17) 国立公文書館内閣文庫蔵 請求記号[197-26]
- 18) 遠藤正治「山本榕室『日省簿』(嘉永六年)」(『実学史研究Ⅸ』思文閣 1993) 203頁参照。
- 19) 『福光町史』下巻939～945頁参照。
- 20) 赤祖父山のこと。東砺波郡井口村と利賀村の境にある。付近一帯に石灰岩を溶かしこんだ赤茶色の炭酸水「そぶ」が噴出している。
- 21) 赤祖父川。城端町東西原付近で川底から自噴する炭酸水が不溶性の石灰華を作り、水中の落ち葉に付着して木葉石をつくる。現在は上流部が「赤祖父石灰華生成地」として富山県の天然記念物に指定されている(昭40・1・1指定)
- 22) 金子寿衛男・梶山彦太郎ほか「木村兼葭堂蒐集と推定される貝類標本の種名目録」(『大阪市立自然史博物館収蔵資料目録第十四集 木村兼葭堂貝石標本』昭和57) 参照。
- 23) 『雲根志前編卷之三』の貝石の項には、作者木内石亭収集の貝石について「予集むるところ一百余品、その形状色理堅軟おのおの同じからず」とある。
- 24) 『氷見市史』3資料編一 古代・中世・近世(一) 653頁。
- 25) 田中優子『江戸の想像力』(筑摩書房 1986) 第二章「連がつくる江戸十八世紀」参照。
- 26) 前掲『読書室物産会について』41～46頁参照。
- 27) 前掲『読書室物産会について』46頁参照。
- 28) 梶山彦太郎「木村兼葭堂蒐集と推定される貝類標本について」(『大阪市立自然史博物館収蔵資料目録第十四集 木村兼葭堂貝石標本』昭和57) 33頁参照。
- 29) 遠藤正治「山本榕室『日省簿』(弘化元年)」(『実学史研究Ⅷ』思文閣 1992) 204頁参照。「11月14日 曾吉解毒齋来買楓樹并草品楓樹直一円金」とある。曾吉は名古屋の花戸。
- 30) 前掲『白井光太郎著作集第Ⅰ巻』355頁～363頁の翻刻による。
- 31) 正橋剛二「各地医学熟入門帳中の越中人」(『近代史研究』第十八号 1995) 13頁参照。越中を東西に分けて較べると、西部が圧倒的に多く他国へ修行に出ており、総数104人中、東西不明の二十三人を除く七十二人について、52人が西部の出身、東部は20人。また、圧倒的に京都への志向が高かった。
- 32) 『高岡市史』中巻 895～897頁参照。

- 33) 『方意便蒙』は、高岡の医家長崎家に残る神農講の記録写本で、冒頭の識語2篇と27篇の記録から成る。正橋剛二「『方意便蒙』高岡長崎家収蔵の神農講の記録」(『医譚』第六四号1993)に書誌と翻刻がある。以下引用は正橋氏の翻刻による。
- 34) 上子元城。神農講の会員。読書室門人。
- 35) 正橋剛二校註『立山遊記・立嶽登臨圖記』(桂書房 1995) 59頁の翻刻による。
- 36) 「うみすずめ」の漢名。ハコフグ科の海魚を指す。全体に硬い甲羅に覆われ、箱状をしている。頭部に角状をした棘が一對あり、体に六角形をした模様が並ぶ。『重訂本草綱目啓蒙』には、同種のハコフグを「勢州二見ニテ乾殻ヲ売」とある。
- 37) 高岡の医者で神農講の会員。読書室に入門はしていないが、山本榕室の日乗からは、榕室に書簡を送り質問をしていたことがわかる。
- 38) 高岡の医者で神農講の会員。読書室門人。天保14年入門。立山に生まれ、のち高岡に移る。
- 39) 和田彦齡。高岡の医者で神農講の会員。
- 40) 『雲根志』等では「珣化石」として、昔戦時に城内に蓄えていた兵糧米が落城の時に焼失して地中で石になったものを載せている。出土した炭化米のことか。本項にある、嵐山の焼米石については、『奇遊談卷之三下』に「嵯峨嵐山のうへ十八丁に、永正四年細川右京大夫政元が家人香西又六逆心しこゝに城を設し、ほどなく香西又六亡し也。こゝに其年せしときにおきし兵糧米の焼うせしが、年へて石に化せしものあり。(中略) 薬品に用ひて奇効あり。用ひ試たることなり」とある。
- 41) グミの漢名。
- 42) 高岡の医者で神農講の会員。京都で修学し、小石家の学塾究理堂に入門。
- 43) 不詳。但し、殻には甲の意味があるので、これを「蘿蔔甲」とすれば、大根の葉を乾燥させた生薬を指すものか。
- 44) おうち。ニカワウルシのこと。
- 45) ワレカラ科の節足動物。主に海草の間に住む。動きが緩慢で形が奇妙なので古くから歌題にされ、「我から」に掛けて詠まれる。
- 46) 高岡の医者で神農講の会員。松田家は代々三知を世襲するが、年齢から考えて9世松田三知が該当する。
- 47) 前掲『読書室物産会について』55頁参照。同品は天保14年(1843)の読書室物産会にも出展され、和名は「蜜産白前」とある。舶来の園芸植物で白前の一種と考えられるが詳細は不明。ほぼ同時期に越中にも入っていたことに注目。
- 48) 津島彦逸(北溪)。山本榕室の日乗からは、しばしば榕室に質問の書簡を送って

たことがわかる。

- 49) 不詳。蛭には抜け殻の意味があるので、蟹の殻の意か。動物性生薬にある「蟹殻」を指すものか。
- 50) 高岡の医者。早いうちから江戸、京都、長崎で学ぶ。十数年の遊学を経て弘化元年(1844)高岡へ帰り医業に就いた。以後高岡文壇の盟主となる。神農講には加わっていない。
- 51) 享保3年(1718)～天明3年(1783)。金沢の俳人。天明中興俳壇の俳諧革新運動の先駆者。寛延3年(1750)以降金沢俳壇の中心人物となる。宝暦末頃から活動が活発になる。多才博識で、見聞した加越能の異事や奇談をまとめた『三州奇談』『続三州奇談』を著す。越中の俳壇とも関係が深い人物で、彼が編んだ春帖『春濃夜』(1770年刊)、『新虚栗』(1777年刊)には越中人の俳句も載せられている。
- 52) 木内石亭の『天狗爪石奇談』には安政5年(1776)9月25日に加州金沢の麦水が石亭を訪ね、能登島で採集した天狗爪石について語ったとの記載が見られる。
- 53) 平村松尾にある高さ約32m、周囲約76mの巨岩。天頂石ともいう。信仰の対象ともなり、伝説が残される。『越の下草』には「伝へ云ふ往昔金剛堂山に役の行者生まれし時、此石の上にて座行有しに、天童下り供物を捧げ、石の根の穴より麗女現して燈明を捧げしといふ」とある。
- 54) 『富山市薬業史』(富山市商工労働部薬業課 昭和50)101頁参照。
- 55) 生没年不詳。越中砺波郡北野村(現城端町)に生まれる。宝暦の頃から京都の本草学界で活躍し、戸田旭山や津島恒之進らとも親しく交わり活躍した。晩年は北野村に帰ったと言われる。元岡自身、初期の「物産会」への出展例が見られる。『廣大和本草』の編纂が知られているが、その業績は毀誉褒貶が分かれる。
- 56) 廣瀬誠「『越の下草』の作者宮永正運について」『越の下草』(岩倉規夫・廣瀬誠・大田久夫・木倉豊信校訂註 北国出版社 昭和55)参照。
- 57) 磯部彰「加陽所見宋版・旧鈔本・古活字本提要－金沢市立図書館所蔵本及び石川県立郷土資料館蔵本について－」(『富山大学人文学部紀要第九号』1985)286頁参照。大聖寺藩では、医者層が学芸活動を主に行っていたことを指摘している。

## 謝辞

武田科学振興財団杏雨書屋には、小論の基本資料とした史料の閲覧にご便宜をありがとうございました。また、小論中の山本溪愚筆『動植物写生図譜』からの図版掲載に当た



っては、讀書室文庫御当主山本元夫氏に格別のご配慮を賜りました。お名前を記して感謝申し上げます。

表1 展品された越中・立山での採集品

■明和3(1766)年丙戌4月15日 京都東山也阿弥物産会(京都)				
	出品者	品名	目録記載の産地等添え書	備考
明3東-1	(記載無し)	越州山姥ノタガネ		立 『雲根志』に関連記載
明3東-2	(記載無し)	越中小米沙		
■文化13(1816)年 讀書室物産会(京都)				
	出品者	品名	目録記載の産地等添え書	備考
化13讀-1	山本永吉	*1岩菊	越中立山産	立
■文化3(1820)年4月21日 讀書室物産会(京都)				
	出品者	品名	目録記載の産地等添え書	備考
政3讀-1	讀書室	コガ子石①	越中立山 金コガ子坂産	立
政3讀-2	讀書室	*2石硫青	立山地獄谷	立
政3讀-3	讀書室	絶頂石①	立山権現前	立
政3讀-4	讀書室	長石①	立山二ノ越産	立
政3讀-5	讀書室	瑪瑙①A	越中城端	西
政3讀-6	讀書室	硝石①A	越中五箇	西 「五箇」は五箇山のこと
政3讀-7	讀書室	金瑪瑙①A	越中	<西>
政3讀-8	奥道逸	瑞昇①	越中徳光浦産	加賀国石川郡徳光の誤記か
■文政9(1826)年5月17日 讀書室物産会(京都)				
	出品者	品名	目録記載の産地等添え書	備考
政9讀-1	奥道逸	瑞昇①	越中徳光浦産	加賀国石川郡徳光の誤記か
政9讀-2	*3田中寛輔 井出市二郎 小林畔二郎 安代啓輔	豆斑石	越中産	
■文政10(1827)年 讀書室物産会(京都)				
	出品者	品名	目録記載の産地等添え書	備考
政10讀-1	讀書室	菊葉黄連	越中二上山	西
政10讀-2	古山齊宮	硝石B	越中五箇	西 「五箇」は五箇山
			越中	<西>
			越中	<西>
			目録記載の産地等添え書 水晶一種 形如握飯者	<立>
				備考
				立
				備考
				立
				備考
				加賀国石川郡徳光の誤記か
				備考
				西 貝化石か
				貝化石
				貝化石
				<西>
			目録記載の産地等添え書 緻質黄色者 越中伏木源義経ノ避雨巖	<西>

## ■天保6(1835)年6月10日 讀書室物産会(京都)

	出品者	品名	目録記載の産地等添え書	備考
天6讀-1	讀書室	小金石②	越中立山小金坂	立
天6讀-2	讀書室	絶頂石②	越中立山権現前	立
天6讀-3	讀書室	石籠黄B	越中立山地獄	立
天6讀-4	讀書室	長石②	越中立山二ノ越	立
天6讀-5	讀書室	山姥ノ握飯B	越中	<立>
天6讀-6	讀書室	石介	越中	貝化石
天6讀-7	讀書室	瑪瑙	越中城端	西
天6讀-8	讀書室	笠石A	越中射水郡田川村	西 射水郡は砺波郡の誤記
天6讀-9	讀書室	金瑪瑙②	越中	<西>
天6讀-10	讀書室	硝石②	越中五箇山	西
天6讀-11	讀書室	瑪瑙②C	越中城端	西
天6讀-12	村松標左衛門	アセ介A	越中産	貝化石か

## ■天保7(1836)年4月10日 讀書室物産会(京都)

	出品者	品名	目録記載の産地等添え書	備考
天7讀-1	讀書室社中	盆裁* <sup>5</sup> 川黄檗	越中産	立
天7讀-2	讀書室社中	御前タチバナ	花村越中立山	立 花村越中立山は越中城端の誤記

## ■天保7(1836)年4月17、18日 玄昌堂物産会(大坂)

	出品者	品名	目録記載の産地等添え書	備考
天7玄-1	兼葭堂	海燕化石①B	加州砺波郡 殖生村桶 葉山俗ニカサイシト云	西 「加州」は越中の誤記 「殖生村」殖生村の誤記

## ■天保8(1837)年8月3、4日 吳服町栗山氏物産会(大坂)

	出品者	品名	目録記載の産地等添え書	備考
天8讀-1	京 讀書室	アセ介	越中 一名ハセ介	貝化石か
天8讀-2	兼葭堂	海燕化石②C	加州砺波郡 殖生村桶 葉山俗ニカサイシト云	西 「加州」は越中の誤記 「殖生村」殖生村の誤記

## ■天保9(1838)年4月14日 讀書室物産会(京都)

	出品者	品名	目録記載の産地等添え書	備考
天9讀-1	江州山田 石亭藏品	理石	越中山田川	西
天9讀-2	江州山田 石亭藏品	飯粒石	飛越之界瀑布上之岸	
天9讀-3	江州山田 石亭藏品	青玉髓	越中* <sup>6</sup> 厚川	西

## ■天保10(1839)年5月12日 讀書室物産会(京都)

	出品者	品名	目録記載の産地等添え書	備考
天10讀-1	渡辺美作守	越中立山モフキイシ		立
天10讀-2	渡辺美作守	ロクショウイシ		
天10讀-4	奥常陸大掾	カサイシD	越中低郡田川	西

## ■天保13(1842)年5月11、12日 玄昌堂物産会(大坂)

	出品者	品名	目録記載の産地等添え書	備考
天13玄-1	田中順安	牡蠣石	越中伏木浦中	西 貝化石

## ■弘化3(1846)年5月14、15日 集芳社物産会(大坂)

	出品者	品名	目録記載の産地等添え書	備考
弘3集-1	藤田太沖	火ケシタイA	越中四ヶ浦* <sup>7</sup> 鉄甲魚	産地の誤記か

## ■弘化4(1847)年5月21日 讀書室物産会(京都)

	出品者	品名	目録記載の産地等添え書	備考
弘4讀-1	大坂 岩永文楨	一寸オコゼ	越中魚津	

## ■弘化4(1847)年6月3、4日 玄昌堂物産会(大坂)

	出品者	品名	目録記載の産地等添え書	備考
弘4玄-1	小山田修造	火ケシタイB	越前四ヶ浦鉄甲魚	産地の誤記か

## ■嘉永7(1854)年5月10日 讀書室物産会(京都)

	出品者	品名	目録記載の産地等添え書	備考
嘉7讀-1	興正寺御慶御藏品	雷斧A	越中	

## ■安政2(1855)年5月21日 讀書室物産会(京都)

	出品者	品名	目録記載の産地等添え書	備考
安2讀-1	讀書室	三葉黄蓮	立山	立
安2讀-2	讀書室	矮生玫瑰	立山	立
安2讀-3	讀書室	*8白根ニンジン	立山	立
安2讀-4	讀書室	立山フグリ	立山	立
安2讀-5	讀書室	細葉岩松	立山	立
安2讀-6	興正寺御殿御蔵品	水晶	越中立山	立
安2讀-7	覚王院	瓢箪イシ	越中布施圓山	西

## ■安政3(1856)年5月21日 讀書室物産会(京都)

	出品者	品名	目録記載の産地等添え書	備考
安3讀-1	三角律之助	雷斧B	越中立山	立

## ■安政4(1857)年5月10日 讀書室物産会(京都)

	出品者	品名	目録記載の産地等添え書	備考
安4讀-1	興正寺御殿御蔵品	海蕪化石E	越中方言カサイシ	西

## ■安政4(1857)年5月16、17日 玄昌室物産会(大坂)

	出品者	品名	目録記載の産地等添え書	備考
安4讀-1	岩永文植	*9黄精	立山	西

## ■安政6(1859)年5月10日 讀書室物産会(京都)

	出品者	品名	目録記載の産地等添え書	備考
安6讀-1	別所雄介	自然銅B	越中	

## ■文久2(1862)年5月9、10日 讀書室物産会(京都)

	出品者	品名	目録記載の産地等添え書	備考
文2讀-1	花戸解毒斎	立山小葉玫瑰花開香		西

## 凡例

- ・目録に記載の越中産品を抽出した。一部に越中・立山産地の記名がないものもあるが、推定越中の物を含む。同一物産会内の記載は目録の順による。
- ・出品者名は目録記載のまま。産地等添え書は越中立山産であることを示す内容を記した。
- ・同じ品が同じ出品者によって出品されている物は、①②③…の番号を振った。これは同一品を時期を変えて重複出品した物と推定される。
- ・同種の品が違う出品者によって出品されているものはABC…の記号を付した。この場合は出品者間の授受による同一品の可能性もある。
- ・目録記載の産地等添え書きから、立山山城で採集されたものには「立」、越中西部で採集されたものには「西」と記号を付した。またそれぞれでの採取と推定される場合には〈 〉を付した。

## [表1註]

- \*1 キク科の多年草。本州の一部と四国、九州の産地の岩場に生える。
- \*2 硫黄の一種で、青みのある質の悪いものを指す。火口と称して発燻に用いられた。
- \*3 この4名の連名による出展品の中にある。
- \*4 結晶水を持つ硫酸銅の結晶。吐剤、防虫剤に用いられた。
- \*5 ミカン科キハダ属の生薬「川黄柏」のことか。ここでは越中産の黄葉を盆栽にしたものであろう。立山産のキハダは生薬としてよく用いられた。
- \*6 現在の福光町才川七付近。江戸初期に才川村は尾川とも書かれた。同村からは瑪瑙石を産した。
- \*7 「ひうちだい」を指す。腹縁や背縁に特徴のある種がある。かぶと魚ともいう。
- \*8 セリ科の多年草。「ちしまにんじん」ともいう。
- \*9 「なるこゆり」の漢名。生薬として地下茎を煎じて強壯剤に用いた。



山本溪愚筆『動植物写生図譜』（讀書室文庫蔵）「花卉三 立山採薬」  
所収の立山で採集の出品



御前  
タチバナ

写真1 「御前タチバナ」（天7 讀-2）



写真2 「三葉黄連」(安2讀-1)



写真3 「矮生玫瑰」(安2 讀-2)



写真4 「立山フグリ」(安2 讀-4)